

# 刊 行 辞

本委員会が所蔵している対馬宗家文書は日本の対馬宗家文庫（県立対馬歴史民俗資料館）、日本国会図書館、東京大学史料編纂所、慶応大学などに所蔵される文書とともに、朝鮮後期の対日関係史を研究する上で貴重な史料である。しかし、これら各々の機関に所蔵される宗家文書に対する調査・整理の実態を見れば、本来の所蔵機関である対馬宗家文庫（現日本国長崎県下縣郡巖原町の萬松院）の文書でさえも 1975 年から総合的な調査が始まって 1990 年現在、記録類の目録集 4 巻だけがかろうじて刊行され、残りは継続事業となっているだけである。

一方、本委員会が所蔵している宗家文書は朝鮮総督府傘下の朝鮮史編修会が《朝鮮史》編纂事業とともに植民統治の資料とみなし、1926 年と 1938 年の兩次にわたって購入したものではあるが、朝鮮史編纂会さえも、これらの文書を内容別に分析・整理することができなかつた。その理由は、対馬宗家文書の成立背景・作成・体裁・種類など、文書の全体像に対する体系的な理解なしでは分析・整理が難しく、また、古語・方言など難解な文体の解読に携わる人力不足も作用していたとみられる。

未整理の宗家文書は 1945 年の光復以来、本委員会で保存・管理されることになった。ところで、本文書は 1960 年代末まで保存・管理にだけ力点をおいてきたが、1970 年代初から本格的な整理が開始され現在は、記録類（6,592 点）、古文書（11,200 点）、書契（9,442 点）、絵図類（1,485 点）、印章（22 個）に大別された対馬宗家文書台帳が完成し、全 28,741 点が確認された。

しかし、28,741 点に整理された記録類と古文書の内容をみれば、同種の文書（記録）を分離して整理したこと、内容が異なる異種の文書を合綴し整理したこと、また、内容別に細分して官庁系別に分類したものの、これを再度年代順に配列・整理できなかつた点などがあり、これから徹底した検討を基にした再整理が要望されている。

ともかく本委員会が所蔵している宗家文書は壬辰倭乱以後 260 余年間、朝鮮と日本の平和的な関係が維持されていた江戸時代の藩政文書として、韓日関係史において対馬の占める比重がどれくらい大きいかを推測させられる。それだけでなく本文書は両国間の政治・外交・経済・文化などの交流を研究することのできる基本的な史料と評価される文書であり、特に書契はほかのどの場所でも見ることのできない貴重な文書である。しかし、これらの文書は最近まで専ら何人かの日本人学者のみが関心を持っているだけで、閲覧しようという人がほとんど無く死蔵されてきた。

ここに私は一日も早く、本史料の効果的な活用方を考究する決心をし、1987 年 1 月に本委員会が果川新庁舎に移転し、機構の拡大改編と研究人力の増員を契機に、まず対馬宗家文書の目録集（記録類・書契類・古文書類・絵図類）から刊行する 5 ヶ年計画を 1988 年に樹立した。

しかし予算上の難しさのために、この宗家文書をはじめ、もう一つの稀貴本である駐韓日本公使館記録の整理・刊行さえも以前から放置されていることもあり、目録集を直ちに刊行するのは難しいことであった。したがって予算の確保を最優先的な目標として設定し積極的に努力した結果、ようやく予算が確保でき目録集の刊行にのりだすことができた。その最初の事業として記録類の原稿作成を進め、第一巻目が刊行されたわけであるが、この記録類目録集を世の中に送り出したことだけでも、実に長期にわたる腫れものが癒えた思いである。

この目録集に収録された内容は「信使記録」・「毎日記」・「譯官記録」・「裁判記録」・「送使記録」・「漂差使記録」・「朝鮮日本間往復書」・「参判使記録」など 45 項目に大別され、朝鮮後期（日本；江戸時代～明治初期）における対馬藩の藩政記録が主である。

記録類目録集の刊行を通じては、日韓関係史に大きな比重を占める対馬の近代史は勿論のこと、朝鮮後期の対日関係史においても新しい研究の手がかりを提供することができると信じる。それに、対馬宗家文書の記録類それ自体の全貌が明らかになるという点でも大きな意義があると言えよう。

しかし、目録集の刊行で学界の関心が喚起されたとはいえ問題点は残っている。これらの文書は対馬の方言と古語が多く、しかも書体の変体仮名まじりの文体になっているため、専門的な知識がなければ解読しがたいということがまさにそれである。

ここに本委員会はこれらの文書を未久に楷書体に整理して刊行しようという計画を立てている。これを解決するためには文書解読のための専門家の養成が急を要する課題であり、関係当局や学界の積極的な声援を期待する気持ちでいっぱいである。

終わりにこの目録集を刊行するにあたり、原稿整理を引き受けてくれた八旬老軀の林鐘海・金秉武、二人の先生と原稿校閲に力を尽くしていただいた日本の関西大の泉澄一教授、崔根泳通史室長、そして校正に力を尽くしていただいた研究委員李薫先生に深い謝意を表したい。

1990年10月3日  
国史編纂委員会  
委員長 朴永錫

(注) 国立国会図書館・東京大学史料編纂所・慶應義塾大学が所蔵する宗家文書は、1990年の段階でいずれも公開されていた。ただし目録については、本文にある通り刊行された目録はなかった。(東京大学史料編纂所では1994年に「宗家史料目録」を刊行した。)

対馬巖原の萬松院(宗家の菩提寺)内にある文庫に保管されていた宗家文書は、1975年以降調査・整理が実施され、長崎県立対馬歴史民俗資料館の収蔵庫で保管されることになった。また目録としては、「宗家文庫史料目録 日記類」(1978年)、「同 記録類」I～III(1978～89年)、「同 記録類IV・和書」(1990年)の5冊の目録が刊行された。現在はいわゆる「一紙もの」の調査整理作業が継続中である。

(鶴田 啓 東京大学史料編纂所)